

## 家庭教育支援チーム・サポーター養成講座① 実施レポート

日時：【県北】6月20日(木) 【中央】7月4日(木) 【県南】7月18日(木)

会場(参加者数)：能代市役所本庁舎会議室(25)、潟上市役所大会議室(28)、横手市朝倉公民館ボランティアルーム(29)

今回は「家庭教育支援チームの基礎を理解し、地域で活動するチームから学ぼう」というテーマで、2つの講話をもとに、異なる市町村の方々と構成されたグループで協議をしました。協議では、チームで取り組みたい家庭教育支援の活動をつくり、それを発表しました。

### 【講話①】

県北・中央・県南の全会場において、当研修の担当をしている県生涯学習センター菊地 智(とも) 社会教育主事が「家庭教育支援チームの必要性」について話しました。家庭教育をめぐる現状を踏まえ、家庭教育支援チームの概要や「一次受け止め」「つなぐ」といった期待される役割、家庭教育支援の支援モデル等を話題にし、チーム設置や取組の再評価について、その必要性和重要性を話しました。



### 【講話②・協議 県北地区】



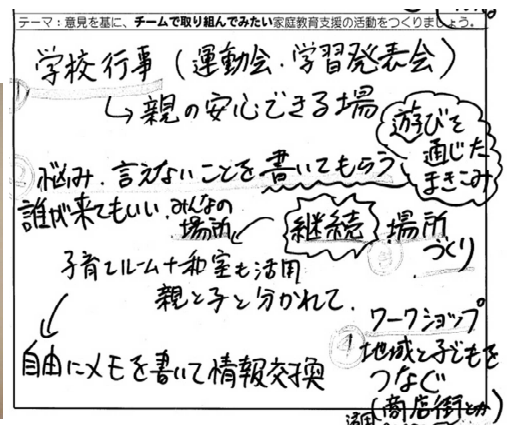
県北地区では、能代市家庭教育支援チームあそびのひろば・ぱれっと代表の田中 直美氏が「子育て中のママたちが ほっとひと息つける場所をめざして」と題して講話をしました。田中氏は、立ち上げの経緯や小学校の学校祭で出前サロンを実施したことなどを紹介しました。特に、震災直後でありながら思い切ってサロンを企画したときに、参加した子どもがそれまでと同じようににこにこ笑って遊んでいた姿や、その子どもを見て安心した保護者の様子から、保護者がほっとひと息つけ、気兼ねなく相談できる場所が必要だと実感したことが、活動の転機になった

そうです。取組は昨年度と同講座からヒントをもらったと言うとおり、参加者目線に立った即実践したいと思わせるような内容で、「保護者が疲れている場合には、時々親と子を離す場面もある」など具体的なアドバイスも聞くことができました。

協議では、チームの主な活動に掲げている、「学びの場の提供」と「居場所づくり」を組み合わせたい支援を提案するグループが多く、現在の取組を生かす意見や「つなぐ」視点に沿った手立てが出されました。

- ・親子が集まれる場所を提供し続けられる毎月サロン
- ・学校行事等親子が多く集まる場所での出前サロン
- ・親の悩み解消につながるような親同士の交流
- ・本音を出せない方のための自由メモ
- ・商店街の活用や遊び要素を取り入れた地域の巻き込み

ほかにも、他市町村の取組から改めて支援の原点を見つめ直したり、他市町村との温度差に気づいたり、当事者間の協議だけでは見出せないことを発見している様子も見られました。



協議後には、**佐藤 周子**（ちかこ）社会教育アドバイザーから助言をいただきました。親子が参加しやすい場づくりや場探し、今ある活動をつないでいく重要性に触れ、どの家庭でも100点はなく、親はなかなか本音を言わないので、チームで寄り添っていくことがいかに大切であるかを強調されました。「誰でも来ていいんだよ」という雰囲気を感じてもらえるようにしたいことを共有しました。

**【参加者の声】**（抜粋）

- ・震災直後の開催は大変意味のあるものだったと思う。「家庭教育支援」に対するぶれない姿勢を模範に。
- ・居場所があり安心して子育てできるお手伝いができればよいと思った。活動することでまたいろいろなアイデアも繋がっていくと思った。継続することも大事なこと。
- ・何よりも子育てにやさしいまちづくりを地域の中で作り出していくことが肝心。
- ・ばれっとのチームの方のお話が大変楽しく、何を目標としていったらいいのか見えてきた。

**【講話②・協議 中央地区】**



中央地区では、平成29年度に文部科学大臣表彰を受けた男鹿市家庭教育支援チームの**小玉 由紀**氏が講話をしました。小玉氏は、チームとして大切にしている心構えや現在のスタイルに至った経緯を話した上で、お茶っこサロンや託児支援、チーム員の食材を持ち寄った子ども食堂等、各機関や施設、学校や団体と連携した多くの実践を紹介してくれました。ネウボラとの連携により就学後も切れ目なく支援できる体制は、保護者に安心を与え続けられる仕組みといえます。講座を通じて、最近の現状を的確にとらえ、柔軟な活動を展開しているチームの姿勢は、参加者に、運営面でも個別の対応時にも、**課題を見出すことが原動力になる**ことを示唆してくださいました。最後には、「どうしてこうなるのか?」「どうしていききたいのか?」とお母さんたちの心に寄り添っていく大切さをおさえ、まとめてくれました。

協議では、「居場所づくり」を検討する上での留意点や、「学びの場の提供」のアイデアが話題になりました。

- ・新生児から高齢者まで全ての人のための居場所
- ・申込制ではなくオープン制の逃げ場となり得る仕組み
- ・親子それぞれが、子どもとの日常の関わり方や自立の一端を学ぶことができる「親子郷土料理づくり」
- ・親子で話し合い考える時間がとれない家庭を救う、親チーム VS 子チームによる「親子トークバトル」

各市町村の実態や参加者の立場が違う中、各地域の悩みを共有する場にもなっていました。



協議後には、**小助川 澄子**社会教育アドバイザーから助言をいただきました。グループで出たアイデアはニーズのありそうな支援ばかりであることを評価し、これからもどんな必要感があるのかを調べていく態度が重要である。また、昨年度の市町村訪問から、地域におけるチームの存在周知はチームのネットワークが広がっていくことと重なる点や、定期的な会合によってメンバーが同じ方向を向くことができたという事例を紹介し、参加者に今後の方向を示してくださいました。

### 【参加者の声】（抜粋）

- ・男鹿市の取組が活動のねらいも含めてよく分かった。「つなぐ」というキーワードが大切。
- ・近隣の地域の実体験を聞いたことはとてもプラスになった。行政主導で始めてもらおうとチームは立ち上げやすいが、市民発信で進められるように参考したい。
- ・グループメンバーの構成がよく、地元は大変勉強になった。行政職員がいてくれたのは有り難かった。
- ・「無理のない」「やれる範囲で」「楽しく、なるべく楽に」「持続可能な取組を」が本研修で一貫していた。

### 【講話②・協議 県南地区】



県南地区では、湯沢市家庭教育支援チーム「和輪人（わわっと）」のリーダーである後藤 孝（こう）氏が講話をしました。後藤氏は、PTAでのお茶っこサロン&子育て関連図書紹介と貸出等、4つの実践を中心に紹介しました。中でも、今年度新たに取り組んだ「5歳児教育相談会」では、保護者に対する「スマホとのつきあい方」についての話や、保護者が相談をしている間の子どもの見守り、読書や読み聞かせを薦める声かけ、和輪人の活動のPRをパッケージ化して提供し、一度に多くの役に立つ情報が得られるように工夫していました。また、保護者に直接、場面に

応じた話し方・聞き方のヒントを伝えることもあり、**子育ての経験が対応に生きている**と話してくれました。

協議では、保護者や地域の方、チームのメンバー、人材育成と「人」に焦点を当てた取組が上がりました。

- ・今活動している場を利用したつながり（昔遊びの会に参加し、じいちゃんばあちゃんも巻き込む）
- ・先輩方や生涯学習奨励員からのアドバイスがもらえるつながり
- ・家庭教育支援に携わる初心者からベテランまでが集う、お食事会を兼ねた勉強会
- ・子育てイベント「大人のダメと子どものなんで？」開催（行政職員も協力、スタッフの顔を見せて安心感を）
- ・子育て経験者や元保育士がサポートする「子育ての駅」（ホッとひと息（ひとえ"ぎ））つげるように）



テーマ：意見をもとに、チームで取り組んでみたい家庭教育支援の活動をつくりましょう。

今活動している場を利用し、つなぐしていく  
～ つながっていく～

例：PTAや学校で行われている子どもの  
お茶会に参加し、じいちゃんばあちゃん  
もまわって親子で参加できるようにPRしていく

協議後には、小笠原 重夫社会教育アドバイザーから助言をいただきました。今の親は未熟な面がみられる一方で、子どもの送迎や宿題添削、キャラ弁などががんばっている姿が認められる。また、問題があると思われる親の8割が、「自分の育て方が悪かった」「こうあらねばならない」という呪縛に苛まれている。そういった親に対し、一次受け止め役は非常に大きな存在であり、アプローチの仕方を工夫して、これからもがんばってほしいと話されました。

### 【参加者の声】（抜粋）

- ・具体的な活動が見えてとても分かりやすく、実践につながりやすい内容だった。
- ・改めて今やっていることの確認ができた。話を繰り返すことで、自分自身の心に定着するという感じ。
- ・和輪人さんに具体的なアドバイスをたくさんいただき参考になった。安心できる場づくりについて楽しく話し合うことができた。
- ・ちょっと立ち寄れる場は気持ちにひと息つかせ、安心を与えることができるので、大切だと再認識した。